

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可
（毎月一回一日發行）
昭和十八年四月廿日印刷納本，昭和十八年五月一日發行

第九卷 第五號

五月號

土 淨



陸海軍 病院

慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願ひ致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◇一口一圓五十錢の淨財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◇毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◇御送金は浄土宗務所事務變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

知恩院門跡
淨土宗管長
法增上寺主

郁芳隨圓序・増谷文雄著
大島徹水

行 誠 上 人

B 6 版二三〇頁 定價一圓五十錢 送料十二錢

學識に德行に一世に秀でた上人の全傳成る！ 上人の言説行業はそのまゝ信仰の深底にして讀者を感化せずんばおかぬ。

稀代の善知識に私淑せられよ

中 村 辨 康 著

日 常 勤 行 式 講 讀

B 6 版二四〇頁 定價一圓五十錢 送料十二錢

毎日お勤めをするお經文の一々を懇切に解説し一讀して信仰の何たるかを解せしむる絶好の信仰の入門書！

會員各位必携の修養好伴侶

文學博士 山本幹夫著 (A 5 型一六二頁クロース装)

法然佛教とわが國體思想

定價二圓二十錢 送料十五錢

神國日本の教法たる法然佛教を歴史的に解明した時局下必讀の書

中里介山著 (三六版二五〇頁クロース装)

法 然 上 人 傳

定價六十錢 送料八錢

文豪の手になる「勅修御傳」の通俗化、上人傳の權威の普及である

佐藤春夫・吉田絃二郎・岡本かの子・倉田百三・郁芳隨圓著 (四六版三二頁)

我 が 信 仰

定價六錢 送料四錢

文壇の巨星が念佛の眞骨頂を隨筆風に語る布教用書に最適のもの

法然上人鑽仰會編 (菊版一一〇頁)

念 佛 讀 本

定價二十錢 送料八錢

權威新進十七師が筆を揃へて念佛信仰の各要目をそれ／＼開明す

發 行 所 法 然 上 人 鑽 仰 會

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

淨土五月號 目次

表紙・扉・目次カツト……………河村長孝

聖典講義 わが國土は第一……………大野法道(三)

米國人の本性……………福田闡正(四)

悟ればこそ……………吉田絃二郎(八)

ビ ル マ の 話……………北林透馬(四)

西峽記 豊かなる空……………佐藤賢順(三)

戰時下の茶の湯……………廣川千芳(元)

信 仰 相 談……………(六)

戰線毒 杯……………小杉利壽(六)

歌壇……………岩野喜久代選(一五)
俳壇……………太田耳動子選(三)
漫畫時局色……………漫畫協團(三)
劍客と侍婢……………(二)
會のたより……………(一五)

法語解説 大調和の中に進む……………中村辨康(七)

編輯 後記……………(四)



淨 土

五月號

源空は智德をもて
人を化する、なほ
不足なり。我もし
人身をうけば、大
愚痴の身となり、
念佛勸行の人たら
ん。

法然上人御法語





ビルマの話 (一)

元陸軍報道班員

北 林 透 馬

僕は軍の報道班員としてビルマへ行つたのだが、一體その陸軍報道班員と言ふのは何をするんですか、と好く人に訊かれる。

それに就いては大本營陸軍報道部長の谷萩大佐と言ふ方が、
「これはドイツの宣傳中隊プロバガンダ・カンパニイの組織にヒントを得たものであります」

と座談の形式で、はつきりさう言つておられたのを何かの雑誌で拜見したが、これは併し谷萩大佐の御謙遜であつて、事實は矢張りそんなもので無い、日本獨特のものゝやうに思はれる。

ドイツのPKは、御存じのやうに、すべて軍人だけで作られてゐる純然たる戦闘部隊であつて、兵隊のなかでカメラを操作したり、文章を書いたりする特種技能のあるものが、相當の特種教育と訓練を受けて、戦闘しながらニュースを取り、記事を書くのだ、と聞いてゐるが、僕等日本の報道班員は、元來が軍人ではなく、軍人以外

の一般社界人のうちから、文化的な面の仕事に關與してゐる、言はゞ文化の技術家と言つたやうなものが、その技術を動員されて、作戰の外郭團體のやうな形で、この仕事をやつてきたのである。戦争と言ふものが、軍人だけの戦争で無く、國家一般、國力の總和としての總力戰が近代戰の特色だ、と言ふ言葉に間違ひがなければ、今度の日本の報道班の組織のほうが、ドイツのPKよりは遙かに近代戰的であり、進歩した組織だと言ふことが出来るのである。

では何んな仕事をやつたのか、と訊かれると、これはお答へ出来る點もあり、出来ない點もあり、まあ報道班と言ふ名稱と、現實に僕等のやつてゐる仕事で、一般に發表され、眼に觸れるものゝ範圍で想像して頂くより仕方が無い。

宣傳を大別して、對外宣傳と對內宣傳に分け、更にその對外宣傳を、對敵宣傳と對第三國宣傳に、また對內宣傳を對占領地區宣傳と對國民宣傳とに、各々分割すれば、普通に報道と呼ばれるものは對內宣傳中の對國內宣傳を意味してゐるし、同様に宣撫と呼ばれるも

のが對占領地區宣傳を意味してゐることは、これも御存じの通りである。

形の上ではさう區別されてゐても、國內報道はいつもそのまゝ第三國への宣傳にもなるし、對敵宣傳にもなるし、事實はもつと複雑なものになる。

僕等のビルマの場合では、參謀長の方針で、國內報道を重視せず、作戰に伴ふ對敵宣傳に重點をおけ、と言ふ命令だつたので、事は報道よりも宣傳が専らであつた。

日本軍は大體昭和十七年一月の初旬から、山嶽とジャングルの泰緬國境からビルマに進駐したのであるが、この進駐をカバーするために、バンコック放送局からは盛んにビルマ人にむかつて呼びか



け、この對ビルマ人放送も僕等報道班員の仕事であつた。

ビルマにゐた英印軍は、この國境地帯からの日本軍進撃は、まったく意表外のことだつたと見え、周章狼狽、爲すところが無かつたやうである。尤も、あんな凄じいジャングルから、猿なら知らないこと、人間が、而も武装した近代軍隊が、堂々と攻めこんで來やうなどとは、英國人の常識ではまつたく考へも及ばなかつた事なのだらう。その爲か、國境にはトーチカなど無論のこと、實に鐵條網ひとつ張りめぐらしてはなかつたのである。解り易い例で言へば、義經の轉越への坂落し、と言つた形であらう。海のほうばかり向いてゐた平家の軍勢と同じやうに、英印軍もたちまち敗走してしまつたのである。

英國軍が、この國境地帯の防備を忘れてゐたのは、これが人間の通れさうにもない、凄じいジャングル地帯だつたからでもあるが、もう一つ他にも理由があつたのである。それは、日本の軍主腦部の間には二つの流れがあつて對立してゐる、と言ふ馬鹿化のことを、彼等は久しい以前から信じてゐたらしい。これは英國だけではなく、アメリカなどでも大真面目に信じられてゐたらしいのだが、日本では田中義一大將以來の傳統的な大陸政策と言ふものがあり、これは滿洲を足場にしてシベリヤのほうに日本を伸ばさうと言ふ、所謂日本北進論と言ふものであり、この北進論を支持するものは陸軍である。と同時に、これと全く正反對に、いや日本はフイリツピンか

ら、ボルネオ、ジャバにまで伸びるべきだ、と言ふ所謂南進論と言ふものがあり、これを支持するものは海軍である。そして、この北進、南進の兩論をめぐつて、陸軍と海軍は始終喧嘩をしてゐるのだ。——と言ふ、大體こんな風な、ありもしないデマのやうなものが、英國人、米國人のインテリ階級、消息通の間に、事實として信じ込まれてゐたのである。

其處で今度の大東亞戦争が始つても、彼等はその馬鹿化た夢から醒めきれず、南方にむかつて進撃してきた日本の軍隊は、海軍ばかりで、陸軍は手を借さず、陸海協同作戦が行はれやうなどは、豫想してゐなかつたのである。

だからシンガポールの場合にも、英軍は海のほうばかり防備に夢中になつて、後方の陸の事を少しも考へなかつた。其處へ陸軍が一氣に突込んで、不落と誇つたシンガポール要塞が、あんなに簡単に陥落してしまつたのである。

ビルマの場合も同様で、まづシンガポールがある間は印度洋は安全であり、印度洋が安全である限りビルマは心配ない、とシンガポールの方ばかり氣にして、ぽかんと印度洋の海でも眺めてゐたのであらう。まさに一の谷の平家と好一對と言ふところである。

國境を突破した日本軍は、一擧にテナセリム地區の重要都市モールメンを占領した。このモールメンは、マレー半島よりの東南ビルマ、テナセリム地區の重要地點として、敵も相當の防備はしてゐた

のだが、これも背後の丘から突入した久米大尉の率る決死隊が、一氣に占領してしまつたので、その爲に久米大尉は壯烈な戦死を遂げたが、戦闘は一瞬にして片附いてしまつた。

このモールメンは港であつて、印度洋の一部であるマルタバン灣に臨んでゐる。正確に言へばマルタバン灣に注ぐサルヴィン河の河口にあつて、河をはさんでマルタバン湾と相對峙してゐるのであるが、このサルヴィン河と言ふのが大變な河なのである。

ビルマの東北方の國境から支那の雲南へ入ると、怒江と言ふ大きな河にぶつかる。怒江とは文字通りに怒れる河であつて、激流奔湍、石を蹴つて流れる凄じい急流だが、これが一直線に、タイとビルマの國境にそつて南下してきたのがサルヴィン河であつて、下流へ來てもやつぱり怒れる河は怒れる河であつて、急流である。この急流が印度洋に流れ込む。ところが印度洋もまた相當の荒海である。東京灣や瀬戸内海とは違つて、千里の波濤が虎のやうな咆哮をあげて岸に殺到してくる。上から流れてくる急流と、海からの波とが、正面から衝突するマルタバン湾の河口は、ちよつとしたシエストロームの渦卷である。これにもう一つ潮が加はつて、満潮時ともなればますます凄じいことになつてくる。押し寄せる印度洋の大波が、せまい河口から河を逆流してゆく。上からの流れが、それにぶつかると、其處で波は、ぐいとい持ちあがつて壁のやうになるが、その高さ五メートルにも達する水の壁が、地響を立て、河口から押しあがつ

てくる風景は、相當に凄絶なものである。

かう言ふ大變な河が横たはつてゐるのだから、たとえモールメンは簡単に放棄しやうとも、對岸のマルタバンに退いた英印軍は、この河を障壁として相當の抵抗を試みることだらうと、これは専門の軍人でなくとも、素人の僕等にも想像のつくことだつたのである。

其處で若し敵の抵抗に強力なものがあれば、悪くすると、此處で一時は膠着状態に入るかも知れないな、と僕等もさう言ふ最悪の場合を考へ、その意味でモールメンを一應僕等の足だまりにとつて、此處で仕事の出来るだけの準備をして、バンコックを出發したのが二月の中旬であつた。

僕等はそれまでバンコックにゐたのである。バンコックで昭和十七年の元旦を迎へ、専らバンコックにあつて、前述の通り放送の仕事などをやつてゐたのだが、その間には第一線部隊について前線へ出て行つたものもあり、僕も一月の初めに一度泰緬國境まで行つたが、國境は越えずに、連絡のためバンコックに引返した。

すこし話が後もどりするが、日本軍が國境を突破してビルマ領に突入したのは一月の中旬であり、従つて國境にむかつて軍隊が動き出したのは、十六年十二月下旬から一月初旬にかけてであつたのである。

大體、北部山嶽地帯のビーメソツドからと、南部マレー半島のチムボーンからと、それから丁度その二者の中間にあたるピサンロ

イクからと、この三方面からビルマに突入したのであり、ビーメソツドからのとピサンロイクからの軍が、モールメンで合したのが一月三十一日であつたのである。(以下次號)

陸海軍病院「慰問浄土」寄附者芳名

(敬稱略)

三	圓	福井縣坂井郡丸岡町石城戸安樂寺	小新	善男
五十	錢	岐阜縣稻葉郡鏡島村江崎	松井	教導
三	圓	大森區池上德持町五四ノ一、新開莊内	大林	秀一
五	圓	山口縣大津郡菱海村入丸	堀	靜一
十五	圓	山東省德縣柴市街	金松	正呂
三	圓	埼玉縣比企郡野本村大字野本	杉浦	文治
十	圓	下關貯金局	某	氏
五	圓	鎌倉市扇ヶ谷	英勝	寺
十五	圓	東京市神田區駿河臺三ノ一	森山アサノ	
二圓十七錢		青森縣五所川原町願昌寺	小山内龍心	
五	圓	青森縣南郡藤崎町	小山	妙子
一圓五十錢		大阪府南河内郡三日村片添	小牧	幸枝
七	圓	東京府北多摩郡保谷町東伏見	栗田直太郎	
五	圓	愛知縣碧海郡六美村 大聖寺	山田	海學
十五	圓	大阪市住吉區湯里町四四二	九一	堂
三	圓	青森縣東津輕郡野内村野内	毛内	憲誠

(十一頁へ續く)



悟ればこそ

吉田 紘二郎

辛夷が咲き、丁子の花がかほるころになつた。不圖氣付いたことは竹藪に巢喰ふてゐた雉子鳩がいつの間にか、ゐなくなつたことである。毎年十月になれば竹藪の中へ來ては巢を喰ふので、いつの秋も櫛の實の落ちるころになれば、鳩を待つのが習慣のやうになつてしまつた。鳩は秋から冬の間は、家の周囲の竹藪にゐては朝夕に静かな鳴き聲を聴かしてくれる。そして梅が散り、辛夷が咲くころになれば山へ歸つて行くのであらう。鳴く音も絶えてしまふ。

雉子鳩とわたくしの生活の間に何のかゝはりもないことではあるが、秋になつて歸つて來てくれる日は俄かに家族が殖えたやうな氣がし、春になつて山に歸つて行かれると、急に家族の誰れかゝ遠い旅にでも、出て行つたやうな感じがする。

このころは朝早くから鶯が啼き、四十雀が鳴いてゐる。懸巢や繡眼兒も鳴いてゐる。しかし静かに聴いてゐて最も地味で、しかも心に迫るものを持つてゐるのは單調そのものゝやうな鳩の聲である。

鳩の聲は何かを覚めてゐる聲である。何かをわたくしたちに語つてゐる聲である。やゝ陰氣に思はれるが、何かをわたくしたちに話しかけてゐる聲である。結跏趺坐の人に對しては釋尊の正覺をさゝやくであらう雉子鳩は哲學者のごとく孤獨であり、靜かである。

旅の山路を歩いてゐて不圖鳩の聲を聴く時旅人らは佇立して、この孤獨なる哲人の靜かな言葉に教へらるであらう。それは單調な短い言葉である。しかし數千語の雄辯にまされる言葉である。尊い瞑想の沈黙である。



昨日は小學時代の友人が伊豆で死んだといふ知らせを受け取つた。

今日は軍隊時代の先輩の訃に接した。

このころ餘りに多い知人の訃を思ふて悵然たらざるを得ない。

死は恐れない。と、言ひ切つてしまへば、それきりであるが、死を恐れない人間はない筈である。しかも死に面して恐れず、狼狽しないために、平常の修行が大切となつて来る。人生の一大事、絶對の大事は臨終の正念である。

人は正しく生きるためにいろいろの修行を積むのであるが、正しく生きることが正しき臨終を遂げんがためである。

人生とは正しく生きることであり、同時に正しく死ぬることである。

今日こそは正しく死なん、今日こそは正しく死なんと思ふ一念に生きる時、はじめて正しい今日の生活がある。一度死の覺悟をくぐり抜けた人の生存ほど靜かな尊いものはない。

第二次特別攻撃隊の若い勇士たちは、その出發の際

して薄茶の席を設け、靜かに抹茶を味つて、あの壯舉に就いたといふではないか。神のごとく靜かな、神のごとく貴い生存である。

今日ほど強く、わたくしたちの生活が祖國といふものに結びついてゐる時代はない。生きること、死ぬることも、祖國を離れては存在し得ない。わたくしどもは一日でも長く祖國のために生きなければならぬ。また時に應じては一日も早く祖國のために死に直面しなければならぬ。

もしこの戦ひに敗れんか、わたくしどもは永遠に眠るべき墓をも奪はれることになる。わたくしどもの生も死もすべて祖國のものである。

街を歩いてゐると若い女たちが雪袴を着けて、甲斐々々しく立ち働いてゐる。そしてみんなが眞剣に祖國の運命を擔つてゐるといふ自覺を、眉宇の間にひらめかしてゐることに氣付く。戦さが長くなれば人の心も荒ぶといはるゝが、わたくしどもはむしろ國民のための美しい心がけを多く見出して來た。これは日本人と外國人との本質的に異なるところから生まれたものであ



らう。英國の飛行機は伯林を空襲して伯林の大伽藍を爆撃した。米國の飛行機や潜水艦はしばしばわが病院船を攻撃して來た。これはわれわれ日本人には到底成し得ないことであつて、つくづく日本民族の尊さを思はざるを得ない。

戦さが長くなるほどわたくしどもは、たのしい日本民族の美しさ尊さを見出す。兵馬倥傯の間に鎌倉武士の生活は禪學によりて研ぎをかけられ、織田豊臣の人々も亦戰陣の間に或ひは佛道により、或ひは茶道によりて靜觀裡に生活を深くして行つた。

今日わたくしどもは敵襲に對して日夜緊張しきつてゐるその反面に茶がますます盛んになつてゆくといふことを聞く。日本民族なればこそである。

一粒の米を大切に押しいたゞく心、一瓢の林檎を幾人にも分けて押しいたゞく心、一碗の茶を押しいたゞく心、すべてこの戦さがはじまつてからのものである。宗教といふ心も畢竟するにこの一粒の米を押しいたゞく心に他ならぬ。一粒の米も、一碗の水も、天によりて恵まれたものであることを膽に銘して感ずるとき、道元禪師の谷川の水を、そつと谷川にもどされた

といふ心持ちを掬むことができる。そこから、一日生き延びさしていたゞくといふありがたさを感じる心もわいて來るであらう。

日々これ好日、たゞの一日生きてゐることの尊さ、ありがたさは、曰く言ひ盡しがたしである。自分の親しい者を亡くした人たちは、たゞ一目でいゝから、現世に於いて尙一度逢つて見たいといふ念願に燃えてゐる。もしそれが叶ふならば、自分の家も財も命も投げ出すであらう。

一刹那の生存すら、これほどの蠱惑を持つてゐる。ましてや一日の生存をやである。

しかもわたくしどもは幾十年のいのちを恵まれてゐる。生きてゐることに對して感謝しても感謝しきれないわけである。

このころ加藤寛治大將の傳をしらべる必要があり、大將の令弟ともお逢ひして古い手紙などを拜見したが、加藤寛治大將といへばわが海軍の猛訓練を創めたそもその武人であるが、或る時愛孫を亡ひ悲歎やる方なしといふ有様であつた。いつたい寛治大將は火の



やうな熱血漢の一面には、播磨屋の加藤清正を觀て涙をこぼすやうな人であつた。だから愛孫を亡つた時も餘程傷心の體であつたらしい。

その時天龍寺の聖であつたか、かねて大將と親しかつたお方が弔みのたよりを寄せてをられるが、その文中に白隠禪師に歸依してゐたおばの事が記してあつた。

おばがやはり孫の死を悲しむので、或る人が、「おばの程のさとりを持つた人がそんなに泣くのはおかしい」と言つた時、「悟つてゐるから泣くのぢや。俗僧なら泣きやせぬ」と答へた、といふ話が書かれてあり、「お泣きなさるべく候」といふ意味の言葉が最後に書いてあつた。それでもなほ書き足りないと思つたものか、封筒の上書きにまで、泣け泣け、と書き添えてあつた。

悟ればこそ人以上によるこびもし、悲しみもする。悟ればこそ生きることを人以上によるこび、死ぬることを人以上に悲しむのだ。

この童心あつてはじめて靜かに死に直面することもできるのだ。

陸海軍病院慰問「淨土」

寄附者芳名（敬稱略）（七頁より）

一圓五十錢	玉野市玉	山川重義
十圓	樺太香敷町源空寺扱	蛭子省一
五十錢	兵庫縣揖保郡室津村	淨運寺
一圓五十錢	茨城縣多賀郡葦川村芳ノ目	川波舜民
三圓	滋賀縣水口町新城	永福寺
五圓	山口縣玖珂郡東郷村	武安保子
七圓五十錢	東京市牛込區細工町三	上田徳五郎
二圓	諫早市榮田	安祥寺
四圓五十三錢	臺北市榮町二ノ卅三	吉村芳藏
一圓五十錢	松江市寺町誓願寺	佐藤學禪
五圓	山口縣大津郡通村向岸寺	鳥田隆道
一圓五十錢	愛知縣舉母町法雲寺	水谷大成
三圓	東京市本郷區駒込淺嘉町八四	長谷川良弘
一圓五十錢	京都府宇治町白川地藏院	竹田法識
一圓五十錢	彦根市戸賀町	棚橋光順



歎 佛 偈 講 義 …… 二 ……

聖 典
講 義

わ が 國 土 は 第 一

大 野 法 道

一

わが作佛の國土をして第一ならしめん

その衆、奇妙にして、道場超絶し

之は第十五偈である。前に淨土について一般に述べたの

であるから、これからは法藏菩薩が、淨土を建設するにつ

いて、その信念を述べられるのである。

つまり法藏菩薩が、人間の正道に精進するつとめを完遂

して、佛格を成就して阿彌陀佛となりたまふ所の極樂淨土

は、あらゆる淨土の中で、第一のものでありたいとの希願

を立てられるのである。

これは言葉から見ると、「第一」の淨土といふのであるから、淨土は種々なが澤山あるが、他のものに劣らぬ立派

な、優れたものが望まれてゐるやうであるが、實はさうではないであらう。

こゝで「第一」といふのは、佛の住みたまふ淨土の様子を、人々によく判るやうに、明らかにしたいといふ、法藏菩薩の信心であると察するのである。いろ／＼の淨土に住みたまふ諸佛のさとりは、いづれも眞實の大生命を獲得したものであるから、それらの淨土に高下優劣のあらう筈なく、同一に美はしい明るく廣く生きてゐる世界であるに違ひない。

併しながら、それ／＼の佛の淨土の様子は、種々に說かれるから一様ではない。釋尊の靈山淨土、阿閼佛の妙喜世界、大目如來の密嚴淨土、藥師如來の淨瑠璃世界のやうに、それ／＼異つた様子が說かれてゐる。

今こゝに「第一ならしめん」とあるのは、佛教の説く淨土の、眞の意味を明らかにしたいといふ、自信の聲と聞える言葉である。

二

眞の淨土の様子が、第十五偈の後半から第十七偈までに五ヶ條に分けて説かれるのである。

その第一は人と國との一體である。

國の様子を説くに人を以てして、「その衆、奇妙にして、道場超絶」とある。こゝに「奇妙」とは、阿彌陀佛の本願に挙げられるところに依れば、淨土の人々は身が悉皆金色であり、三十二相を具へ、好醜なく、我身可愛いやの閉ち籠められた心でなく、正定聚に住して、善くない事をする者のないことで、つまり、國中の人々が一體となり、自らの本分に覺醒して、向上練磨怠らず、本務に勤めぬところ、淨土であるといふことである。

之によつて教へられることは、人から離れた處に、別に淨土があるのでなく、淨土には必ず人が居るのであり、それらの人々は美はしい國に住む喜びの自覺を持たぬ者は一人もないといふことである。

之を知らずに淨土を見ると、佛教では、釋尊が修行をして佛となり、淨土といふ立派な處を形造つて、自分でそこに住んでゐるのだ、われ／＼はその淨土に、あこがれをもてばよいと、思ふ人があるかも知れぬ。それも淨土の一つの見方には違ひないが、そのやうに淨土を見たのでは、淨土が本來、佛一人だけのものになり、狭いものになつてしまふ。なぜといふに、その淨土は佛といふ一人だけが、宗教的に完成して、自分で淨土を形造つて、自分でそこに住んでゐることになるからである。又その見方は個人主義の立場に立つて、佛を見るものであつて、大慈悲の心に燃えて、衆生濟度に盡したまふ、佛の心を見失つてゐないかを反省せねばならぬ。

三

わが日本は、世界第一の國であることは言ふまでもない。こゝに第一といふのは、世界には多くの國があつて、それ／＼國の様子が異つてゐるが、わが日本はそれらの中で、一番よい國であり、第一位にあることではない。

もしそうであつたら、第一位に續いて、第二位第三位に置かれる國があるかも知れないからである。日本は世界に

絶対無比なる、國體を具へてゐるのであつて、之に相亞ぐものは、世界のどこにも絶無でなければならぬ。その無比なる所以は、此國には

上に萬世一系の大君ましまし、下に一億の民草があつて、一君萬民そのまゝ國であり君と民と國とが、一體なるところに存するのである。

かゝる國體は

神意に發し、國の聚めより來るのであつて、尊嚴極りなきことである。又同時にそれは、國家の眞にあるべき姿なることに於て、鑽仰措く能はざる所である。

殊に一億民草が、天業を翼賛しまつて、國と一體なることは、何とも勿體なき限りであり、こゝにわれらの身を粉にしても、お國のために盡さねばならぬとの、決意を固める基がある。

日本が米英のやうな大國を、敵として戦ひつゝ、斷然優勝の地位を持ちつゞけてゆくのは、一に大御稜威によるのであり、それを畏む皇軍將兵の國に殉ずる生活があり、銃後國民の戦争生活に徹する、自覺ある生活があるからである。

かくて一億の民草は、この尊き國體を奉戴する心を、ど

こまでも、擴充し、強化し、練磨し、徹底し、それを生活の上に具現せねばならない。之が皇國民の本分であり、本務であり、之はいづれの外國の人々の持ち得ない、無上の光榮であらねばならぬ。

但しこの光榮の喜びには、不斷の反省、または苦慮が伴ふ筈である。

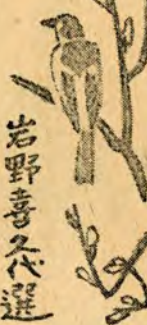
それは我が身の生活が、尊い國體に相應してゐるか、自分が今爲してゐることが、お國の體面を潰すやうな事はないかと、常に省みると、貪・瞋・痴の我が儘の出やうとするのを撃退して、よりよく國體に相應するやうに、努め勵むことである。

もしわが國土は第一と知つて、すぐいゝ氣になつたり、光榮の喜びに酔ふて、皇國民の本分を萬一にも見失つたりするやうでは、まことに、尊嚴なる國體に對し勿體ないことである。それは驕慢であつて、既に心の中に弛みが出来てゐる。

いかほど正しい道を努め勵んでも、まだ足らぬといふ、謙虛な心で、どこまでも張り切つて進み進むのが、日本人の眞面目であらねばならぬ。

歌壇

岩野喜久代選



北海道 石川 章
七度は人に生れて敵討つと云ひつ
る魂かこれの軍神
評 古の忠臣に七度人間に生れて

君に盡さうと云つて死んだもの
があつた。今次大東亞戦争に忠
烈鬼神を哭かむる國民を感動させ
てゐるが、それは、あの七生報
國を誓つた人の生れ更つたもの
ではないか。その大精神が未だ
に脈々と傳はることに作者は深
く心を打たれたのである。

京都市 葉山 千高
坪たらぬ狭庭なれども天地のめぐ
みあふれて草ぞ萌え立つ
評 天地は何と公平無私なもので
あらうか。ごらん下さい貧しい
私の家は庭と申しても一坪に足
りぬ狭いものですが、春ともな
れば光を浴びて草が芽ぶき花が
咲きます。ありがたいことです。

神奈川縣 和田みえ子
一寸ぢにたのむ心の道を得れば憂
き世の何を何か歎かむ
評 精神生活の清く高く深いこと

を望むものには、現實生活の不
如意はさう他の人ほどに辛く感
じるものではない。ただはげめ
ども思へども道に到り得ぬ嘆き
のみが深い。

京都市 福島孝治郎
噫こころ哭きて云ふらくソロモン
に散りにし兵の志繼げ
北海道 花田 順往

阿彌陀佛と唱へまつれば後の世も
心あかるく待たれぬるかな
北海道 伊達 丹雀

歸還り來て老いたる父のふしくれ
し拳を見るもいたくなつかし
静岡県 佐藤 祥吉

はるばると我れを見舞ひに來し兄
の土あれの手をしばしみつめぬ
満洲國 鶴岡 慈禮
春霞立つ曠原に雪かげの消えてゆ
たかに水の流るる
北海道 中村 茂舞

ためしなきこの大御代にあひまつ
り忝しなしと襟を正しぬ

兵庫縣 前川 泰象
皇軍の大きな力に守られて養ふわれ
はかくも癒えけり
栃木縣 大輪 益啓

目醒め出で顔を洗ふと庭に立ち朝
の日拜む吾子の柏手
大分縣 梅田 徳一

吾がたつき如何に苦しくあらむと
も堪へて行かまし勝ち抜くまでは
北海道 永尾 慶吉

一日も早く癒えつつ歸れよとやさ
しかりけり隊長殿は
名古屋市 鷺津 淵順

夜の更けに靴下綴り夜明くれば厨
に炊く決戦の妻
富山縣 佐伯 禪祐

必ずや心つくして勵ままし此の身
擽げてこの兒育てて
京都市 本田 行勇

勇みゆく友の武運を祈りつつ吾が
征く日をば數へ待つなり
東京 上野 昌子

故郷の春を告げんと君にあて封ぜ
し花の色よあせるな
岩手縣 中村 てつ

つれだちて共に出で征く親のなき
若き兄弟に武運あれかし

大阪市 森本 清浩
美しき月と仰げど彼方には銃劍握
る兵の居ませる
朝鮮 閔谷鉞次郎

目ざめに母思ふふらし
北海道療養所 道 鎮茂

三度食むこの飯こそは農民の生命
をかけての汗なるぞ血ぞ
東京市 小柳 萬

襲ひ來し假裝敵機にいどみゆく撃
ちて止まむと雫のごと
東京 清水 富

暖かく臥し居る己が甲斐なさよ視
哨に立てる友を思へば
奈良縣 中谷 公子

學び舎に馬酔木の花の咲き匂ひ入
學考査ちかきこの頃
熊本縣 五野 一之

大空に聲も姿も溶け入りぬ歌ひ歌
ひて昇る雲雀は
秋田市 妹尾馬之助

ながめては胸のおもひものどかな
り花にまされる友なかりけり

投稿規定

はがきに一週二百以内
とし一稿一稿別紙に
題名と住所氏名明記
の上送ること

毒杯

小杉利壽



「叔父さん戦争つて辛かつて
!!」

「うん!! 面白かつた事も有る
よ!!」

「ちや面白い事はかしで樂な
方ばつかし叔父さんは廻つた
のね」

「いや、飛んでもない、樂の
方に廻つてたなんて、随分辛
い事もあつたよ」

「さや、どつちなのよ、ハッ
キリしなさいよ嫌だわ、叔父
さん!!」

「ハッキリしないわけぢやな
いけど、辛い事もあつたし、
面白いこともあつた。悲しい
事もあつたけど愉快な事もあ
つた」と答へるより他に適當
な言葉を知らない私である。

この間まで入學考査で、甲
が幾つで、あの女學校の校風

はい、がちつと荷が重いし、この學校は近く
て好いが餘り榮えないしと相談を受けたお下
げ姿の姪の香代子がもうこの四月から女學校
の四年生、潑刺たる皇國の大和撫子となつて
大人びた口振りで私に聞きたがるのである。

私はボチャ／＼した頬べたの紅い花の蕾を
思はしめるやうな若々しい香代子を對手に配
給のお酒をチビ／＼やつてる睡間が私の樂し
みの一つなのである。

「叔父さん!! 御酌が下手だとお聲さんに嫌は
られるから、今の内練習だと思つて叔父さん
にお酌なさいよ等と又云つたら承知しないわ
よ!! 私お嫁なんかに嫁かないんだから!!」等
と前以て豫防線を張つて、しまひには「今は
生き残るか、亡びるか、大切な時、若い女子
だつてこんな裕々閑々としては申譯ないのだ
けど、叔父さんだからまあ勘辯して上げるの
よ等と勿體つけられて戦争ばなしをさせられ
るのである。

戦争話と云つても、ソロモン會戦とか、コ
レヒドール攻略とかハデな話ならいゝのであ

るが、日支事變突發當時に征つた時の杭州灣、敵前上陸、天生港、九江敵前上陸と云ふ様なちつと微が生える話で氣が引けるので有るが、夫がお藥の利き目と持前の心臓とが相待つて香代子を濃厚しく御相手させて呉れる役目を果して呉れるのである。

× × ×
 手柄なく、故山に入るや雲の峰

この様な心境でゐた自分が、〇〇燈作業、名譽の決死隊に選拔されたのだ。何か湧揚る血潮、力強い緊張、この氣持が一つになつて「ヤルゾ」と心の中で誓ふのだつた。生死を共にする兵四名。自分の班から選ぶ私は、容易では無かつた、可愛い我が子の様な兵達、皆希望し熱望するからだ。日本人だけが持ち得る、之の世界に比類なき大和魂に直面した自分は唯感激するのみであつた。

想へば昭和十三年七月廿二日午前十時〇〇部隊へ配屬される我々は、戦友達の激勵を脊に受けつゝ、迎への鐵舟に乗る、船首に白くくつきり浮び上る、C 4 の番號は想ひ出の今

となつて、もつとも深き印象であつた。袂別も心の中、舟は本船を放れ〇〇へと向ふ。揚子江の濁流は時速六哩の早さで流れ、鐵舟の舳へ猛烈なしぶきを揚げる。と赤土をかきませた様な揚子江の水が、舟が進むにつれて、急に青々した水に變化して行く、それは湖口の先、九江の後に當る瀟陽湖に近づいたためであつた。

時七月廿三日午前零時三十分、沖に居る〇〇艦より出發の信號あり、「ヨシ出發」部隊長は先頭にあつて、敵の一角を睥睨するや大聲を發する。それより先に一線部隊を乗せた鐵舟は、〇〇隻三々伍々輕く揚子江へ滑り出てゐる。目的は只一つ、敵を撃滅するにあるのだ。我も其の中の一隻となつて眠れる様な江上を前進する。小雨は音なく降つて揚子江は漆黒の暗夜、其の中を各鐵舟は無言の連絡を取り乍ら、一絲亂れずに前進するのだ。

然し其の幾多の鐵舟の中で使命の違ふ一隻は我等の乗れるC 4 號!! 前進浮游する事約二時間、其の頃より雨全

く止んで、空には氣まぐれな星がまたたく。時燃せるか午前二時三十分、光時計は青い光を放つて、其の一刻を指してゐる。各鐵舟は一線となり敵岸へ!! 白波を蹴立て、突入する!! 其の間約〇〇米、それにおびえたか支那軍盛んに機銃小銃を亂射する。ハヒューツ／＼と間斷なく頭上を耳許を弾がかすめる。全員舟の中へ伏せ!! 隊長の大聲も、爆音に消され勝ちだ。部隊長は矢庭に抜刀して敵地に擬す。續いて小隊長も抜刀する。自分は右手に銃を左手に〇〇燈を固く握り締めた。

今や敵軍は死に物狂ひの亂射亂撃となつた。湖上をすかせば鐵舟の群が見えるであらふ。彈は文字通り雨散れとなつて降り注ぐ、其の中の一彈は鐵舟を貫き、隊長の頬をかすめる。小瘤なり敵兵、何者ぞ。鐵舟を運轉する兵は、スツクとばかり仁王立、鐵甲をすてゝ、只一本の日の丸の手拭ひを頭上にキリリと締めて、真しぐらに突進する。暗夜に浮ぶ其の勇姿は鬼神も三舍を避く様、ズシーンと物凄いシヨツクで、敵岸に舟は乗上げる。頭

上では敵の機銃が火を吐いてゐる。

「伏せたまふ。〇〇燈用意」小隊長の號令が懸る前に、我々五名はすでに決死の作業中であつた。後續部隊の揚陸の爲に目標となるべき、〇〇燈は、一分一秒たりと云へどもゆるがせに出来ない。

斃れても、止まぬ我軍の攻撃に、頑強な敵も遂に退却しはじめた。暗の中を目茶々に打つ敵の銃砲聲は今や最高調に達してゐる。苦心の〇〇燈は今完全に敵の寸前に立つたのだ。

燈色の光は〇個友軍へ向つて燦然として輝いてゐる。おゝ萬歳！思はず心の中から出る叫びだつた。出来上つたかヨシ伏せ！前方を睨む小隊長の聲に我に返つた自分は、福島市川！野口！枝原！と暗に向つて叫んだ。「ハイ」元氣のよい四名の聲が聞える、皆無事だ、歡びと感激が一緒になつてジーンと目頭が熱くなつた。腕時計は三時を少し過ぎてゐる。再びその時佐藤軍曹の太い聲が自分の身を貫く、我々決死隊は頭上にある鐵條網

を破壊し、友軍の突撃路を作れ！と更に前方へ驅上つた。我連れじと續く我等五名、二手に別れ決死奮闘の一刻は遂に左右へ約百米の鐵條網を完全に破壊し去り部隊の突撃路を作る。切斷する武器を持たぬ我々は、全身の力を双手に集中して一本又一本と杭をゆさぶり抜いて行くのだ。一本倒しては萬歳、二本倒しては萬歳と心の中で叫ぶ。我々にはさながら、鬼神が乗りうつゝたかの様な一刻であつた。

敵の死體は無數に散亂してゐる。夜は全く明け渡り、朝風は紅潮する頬を氣持よくなでてくれる。砂丘には占領の印に日章旗が二本翻翻として飄へつて居る。右手のは部隊長殿の日の丸だ、部隊を代表する其の旗の左手には熱望せる福島一等兵の旗がひらめく、一兵士として之れ以上の感激が又とあらふか、今朝の激戦を無言で語る彈痕が無數にある、それを仰ぎ見る彼、其の面上には感激の色が溢れてゐる。

我軍の尊き戦死傷者を收容する擔架隊は大

童だ、急造の草標に名も無き草花は胸を打ち只目頭のにじむ想ひだつた。後續部隊の兵士達が敬禮し更に近くの草花を手折つて添え、そして前進する様は日本軍ならではの見られぬ真心であらふ。當時の激戦をかへりみて、よく無事であつたと今でもむしろ奇異の想ひをしてゐる。

幾度か仰ぐ〇〇燈は〇〇旗に變り我軍の成功を祝福して居る如く飄へつてゐる。自分の一生忘れる事の出来ない感激の一頁昭和十三年七月廿三日午前九時だつた。

× × ×

君も生きてゐて呉れたか？と共に戦友と抱き合つて泣いて悦んだのも其の頃の事である。其晩、萬歳の險へ母の顔が浮んでどうしても睡られなかつた。

假寐の藥床の中で睡られぬまゝに寢返りうつてゐるや蠟燭の燃え残りの薄明りの中から小杉班長殿！此處に支那酒が有りますが、と云ふ聲が聞える。

低聲では有つたが、月餘に渡つてアルコール

ルには御目にかゝつてゐなかつた皆はスクット電気でも觸れた様に一勢にむく／＼と起き出して來た。

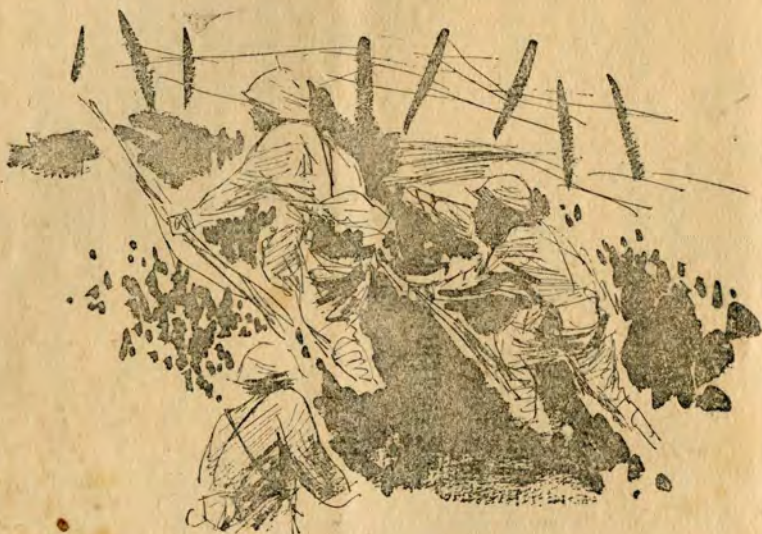
「凄え!! 凄え!!」

とたつた一本の支那酒の罎のまはりを取圍いて誰一人離れ様としない。

「一體、何處から仕入れたんだ?」

「亦クリークの泥水入れておもはせ振りするんぢやないか!!」
等と半信半疑の内に持つて來た兵隊に聞くと、先程迄頑強つてゐた支那兵のトーチカの中から持つて來たと云ふのである。

「何んだ!! チェッ!! そいつは毒が入つてゐるよ!!」との誰かの言葉に流石に好きな道中もいきなり飛び付かふとしなかつたが、やはり未練があるのか皆囂を振つて見たり、薄明りにすか



して見たりしてゐたのである。

すると今迄寝てゐた筈の糸山軍曹が露床の

中から、ムク／＼とかま首を持上げて、

「華々しい戦鬨を交えて死ぬのは本望だが毒酒を飲んで死んだなんて、故郷にある両親に何と云つて申譯立つか、俺が明日の朝迄冷くなつてゐたら決して飲むな、夫迄俺が預つておく、夜はしんしんと更け渡る安眠妨害だ、早く寝ろ!! 寝ろ!!……」

それも一應の道理が有ると誰しもが氣にかゝり乍らも數日來の疲れで、いつの間にか安らかな睡りに陥つてゐた。

翌朝起きると戦争も知らぬげに丘の周圍の森には、油煙ミン／＼蟬が聲を競つて内地の夏を思はしめる様に鳴き立てゝゐる。

糸山軍曹は朝から鶏の目、鷹の目で何か落し物でもした様にあちこちと探し物をしてゐる。

「何か落し物でもしたのか!!」と聞くと、「いや心配してゐるんだ、昨日の毒の入つた支那酒さ、兵隊さんに飲ませると大變な事になると思つて探してゐるさ!!」との事に、

「あゝ!! あれか!! あれなら、昨夜お前さんの

劍客と侍婢

源義經はたれさがる柳の枝を切つて、八斷したが最初に切つた一片がまだ水に墜ちなかつたといふ話がある。この話を聞いた慶長年間、劍客松林彌也齋といふ人が、試みに柳の枝を切つたところ、最初の一片が水に墜ちるまでに十三に切つたといふ。この彌也齋が一人の侍婢を三年の年期ときめて召換へた。そしてその婢に向つてこう約束した。

「何んでもよい、お前がわしを驚かすことが出来たら、その時には三年分の給金をやり、その上さらに暇をくれよう」

ある時のこと彌也齋が大いに酔つて家に歸り、酔ひ倒れて闔を枕にして寢込んでしまつた。婢はここぞとばかりに障子を力まかせに立てきつてみたが、障子はびくとも動かないで、反つて彌也齋が目覺してしまつた。よく見ると、寢居の襟に鐵扇を入れて寢てゐ

たことがわかつた。

又ある時、彌也齋が歸宅して足を洗はうと思ひ、婢に「湯をもつてこい」といつた。婢は心得て、故意に熱湯を桶に満して持つてきた。彌也齋は油斷せず、そろ／＼と足を入れて湯加減をみた。そして

「こんな熱い湯を持つてくるやうでは、まだ駄目だ、暇はやれぬぞ。早く水を持つてきてうめろ！」

といつた。そこで婢は水を取つてきてザブンと桶に入れ、「これなら加減は宜しうござあります」といつた。

「さうか」と彌也齋は桶に足を入れてみて、「アツ」といひざま飛び上つてしまつた。これは婢が水をうめたと思つたのは誤りで、熱湯の上に更に熱湯を加へて注ぎ込んだのであつた。そこで彌也齋は歎息していつた。

「誠に敵となつて誤はれると、婦女子にも討たれることがある」そこで約束通り、直ちに三年分の給金を與へて暇をとらせた。

可愛い兵隊さんが、分隊長丈けを死なしちや可哀想だ、生死を共にしてゐる仲間なんだからつて皆綺麗に平げちまつたよ」

と云ふと

「えゝ！生死を共にした仲間だからだつて！變な處で、旨く云つてらあ！！」

と半ば感心した様な半ばガツカリした様な糸山軍曹の顔を思ひ出すと今でも吹き出したくなる。

糸山軍曹が恐々毒味してゐる内に好い氣持で冷くもならず熟睡してゐるのを見て、兵隊さん達が安心して片附けてしまつたものである。

× × ×

さう云つて懷し相に戦場の思ひ出を語りました時、香代子にはほゝ笑み乍ら

叔父さんその後でノコノコその毒杯と云ふのをやつた方なんでせう」

と冷くなつた残り少い徳利の底をあけて呉れたのである。

俳壇



飯田市 古川 哲洲

うらなはば青くやあらん春の雨
評 春雨の色といふものが、あ
るとしたならばどんな色であ
らうか。之をとつたらきつと
青と出るであらう。春雨によ
つて萬の植物は皆な緑に青に
生をうくることから想像した
ものであらう。此の見立面白
し。

富山市 新田 正治

水車蹴上げる水に芹青し
評 蹴上げる水は良き表現で
ある。芹青しは水車場の特
徴をとらへてゐる。

東京 山本 竹泉

梅の茶屋爐りにたける汁粉かな
評 中七字の着想面白し。

大津市 三木 正孝

春の色そこに来てをり露の臺
東京 清水金鈴子

寒木瓜の紅雪にきびしかり
北海道 石川 章

春日や笑顔こぼして人の往く
青森縣 丸尾 傳山

山里のかほりめでたき草の餅
北海道 山下幸太郎

水仙を嗅く官兵を拜しけり
桐生市 野口 美雄

遠山の霞みて春は来りけり
同 野口 建策

早春をふきのとうよりむかへけり
京都 福島孝治郎

萬感と氣笛とへだつ春の潮
名古屋 堀場 典雄

この寺とともに古りたる寢釋迦哉
北海道 高島喜八郎

雨だれはしづまり春の日は沈む
満洲 鶴岡 慈禮

雪鏡の裾より昏れて大いなる
越中國 佐伯 光安

ながくと雪の筏や雨をよぶ
京都市 近藤 青牛

清水を高台寺へ抜け別れ霜
岩國市 長岡 白朝

帆に座して帆を繕ふや暖かき
東京府 萩原 通孝

戸を繰るを待ちて朝の雲雀なく

明石市 山本多可子

障子まで延びし日足や梅の春
伊豫 楠田 満

桃の芽に光のこして日の暮るゝ
越中高岡 内山 覺阿

河口の春おほらかに鷗飛ぶ
愛媛傷療 折田 双生

縦長の姿勢の高し霧の渡河
中野區 坂口 康夫

乙女等が草刈れば雲雀揚りゆく
名古屋 宇佐美研阿

熊貓の聲寒風にさらはるる
大阪 森本 清浩

故里の猛き吹雪にわかれ往く
小樽 中村 茂舞

残雪に笹の香のなつかしや
富山 小西 良雄

退院の友かへり見ぬ雪の中
四平省 八木 茂

大水柱ことりと落ちて横たへる
富山 佐伯 禪祐

露の臺あちこちとして雪消ゆる
東京 井原しま子

通ひなれし道の柳の芽のいでし
京都市 本田 行男

窓越しの木の間に集ふ雀の子
名古屋 熊澤 秀國

うつるなる顔あげ老の日向ぼこ
廣島市外 山口勇治

城の見ゆるまで漕ぎ出でぬ湖の春
米子市 伯耆 白土

荒磯のしぶきの見ゆる初湯かな
大阪市 森山 清嚴

満月の夜空に浮えて木魚かな
同 萬 空頭

若草の二つ三つあり春浅く
栃木縣 大輪 益啓

この雨を久しく待ちて麥青む
北海道傷療所 澤口 清

霧笛鳴らしならして入港す
京都市 拜郷 賢三

何處となく鳥眺めて冬の煙
満洲三三省 神田 儀一

餌を漁る豚見れば春近し
朝鮮 三浦砂子

忙中に句を得たりけり春の風
名古屋 江村 孝融

み戦に出で往く兵の笑顔かな
兵庫縣傷療所 片岡 壽

療養の温泉に仰ぐ峯の雪
大阪 堀田 俊光

名も知らぬ鳥なからに春とこそ
同 西野 菊

春雨の庭にありけり戸の鉢
同 戸田 慈誠

縁側の春日に酔ひぬ猫と我
同 同

投稿規定

官製はがき一同二切以
内とし、住所氏名明記
の上「浄土」欄欄部併
置候あてに送ること



豊ゆた

かなる空くう

(西峽廬
雜記)

佐藤賢順

「未だ曾て一法も、因縁より生ぜざるものあらず。この故に一切の法は、これ空ならざるものなし。」(龍樹「中論」觀四諦品)

因縁より生ずるものとは、この偈文の語意によれば、縁起したもののことで、因縁生はすなはち縁起である。物または事が空であることの理由は、それが縁起したものであるからである。縁起は空の重要な論據である。縁起したものであるからもとよりそれ自らによる存在性のありようはすはない(無自性)、存在するものの不變の實體はない(無我)、それ故に、空である、といふことになる。

「かの縁起、それを我等は空と説く。」

空とは、別の言葉で言へば縁起といふことである。存在する物の眞の相は相依相關である。物はそれ獨り切り離された抽象的・固定的な存在者でなく、無限に交流し合ふ諸の關係の中にあり、諸の關係が暫くの間、静止してゐるかのやうに見える時に結んだ結び目であり、實體を伴はない關係そのものである——私どもは關係と

いふと何か變らずに存在する實體と實體との間の交渉を考へたがるが、そのやうな實體を抜きにして、無限に流動する關係そのものを考へてみたら、眞の意味の流動そのものの、相依相關が明かになるであらう。凡ての物は常に流れてゐる。

そのやうな相を「あるがままの相」といふ。物のあるがままの相を諸法の實相といふ。もし物が全體の生きた流動から切り離されてそれだけで存在するやうに考へるならば、それはあるがままの見方ではない。實相に順應した見方ではない。また、この人生が何時までも變らず樂しく續くものであると考へるならば、それも實相に順した見方ではない。人生を苦と考へ、苦の人生を齎すものは愛慾であるとするならば、それは如實の知見といふべきである。苦の世界は愛慾に縁りて生ずる。人生や人生を包むものとしての世界を一聯の縁起の項と見て、固定的な存在者を認めない立場は、人生や世界のあるがままの相に於いて見る立場である。であるから、空の世

界観はあるがままの世界観であるとも言へる。

× × ×

あるがままの、とか、ある通りの、とかいふことは、これ、これの如き、といふことであつて、難しく言へば、如是であり如である。それ故、あるがままの世界観は、また、如是の世界観であり如の世界観である。迷執に把へられてゐるから、人生や世界の如の相が見えないのであるが、修行によつて自らを鍊成して、眞の如に隨順する智慧を得るならば、これこそ眞の物の見方である。

かうして、あるがままの相に於いて、物や事を見ることができれば、物や事は決して無に歸してしまふのではない。空の世界観は虚無の深淵に飛び込むことであるなどといふ非難は、全く當つてゐないことが解るであらう。それは落莫たる無の荒野を彷徨ふのではなく、やはり有を肯定するのである。人生や世界を特別に變つたものとして見るのではなく、迷執に鑿縛された立場と同様に、やはりこれを在るものとして認めるのである。が然し、その在る、有は低俗な立場に於けるよりは、遙かに高い立場に於いて、在るとして、有として肯定されるのである。人生や世界は在るには在るのであるが、新しい光に照されて見直される。空の世界観はやはり有の世界観なのである。が然し、その有はだんだんと發展して上昇してゆく有である。言はば、膨れてゆく有である。どんなふうに膨れてゆくであらうか。それは後に述べるが、空が停止して固定したものでなく、常

に發展する動的なものであるから、その立場に於いて肯定される有も、また常に發展し上昇するのである。

× × ×

經論では、色々に巧みな比喻で、諸の物や事の實相は空であることを説いてゐる。

「色も聲も香も硬さ軟かさも物も、みな空で、燄か夢の如く、乾達婆城（蜃氣樓）に現れる城の如くである。」

また、幻化の人の如く、鏡中の像の如くで般若經には空義の十喻といつて、十の比喻が重ねて説かれてゐる。

「諸の物や事は、幻の如く、焰の如く、水中の月の如く、虚空の如く、響の如く、蜃氣樓の如く、夢の如く、影の如く、鏡中の像の如く、變化の如くである。」

經論はかうした比喻で空が如何なるものであるかを理解させやうとする。まことに、世の實相は、空飛ぶ鳥の跡を残さざるが如く、水面を泳ぐ水鳥の羽を濡らさざるが如く、その如く跡方のないものである。

物は衆縁和合して生ずる。恰も車が輪・輞・輻・轂等合して、車と呼ばれるが如くである。とも書かれてゐる。

經論の意趣は、面倒な論理を用ひて、空の意味を論證しようといふのではなく、比喻など直接的な、即事的方法で、空の眞義を體得させようといふにある。何故ならば、空は論理的に論證して理解し

たとへ何の足にもならず、ただ實踐に連續し實踐的に獲得されてのみ空の意味が顯はされるからである。空觀といふ言葉の示すやうに、空は靜慮の對象である。然しそれはただ手を拱いて瞑想をこらす靜觀的な觀想に終るものではない。ましてただの知性的概念的な遊戲に終るものではない。空を對象とする智慧は般若（ブラジュナ）と呼ばれる智慧である。人間を中心として展開される世界の實相は空である、といふ認識——認識といふ言葉は、極めて非東洋的で、知性的な、概念的な、いやな響をしか與へないが、もともとこの言葉は、實踐的な智慧などといふ考へ方の乏しい西洋に發祥したのだから仕方がないとして——が般若である。この眞の智慧が、般若と呼ばれて、他の、あつてもなくつても直接には人間の救ひの問題とは關係のない知識（サイジュニャーナ）世俗智と區別される。

さてそこで、忘れてはならないのは、空の世界觀の實踐性である。人生觀・世界觀とは言ふものの、それは單なる觀方ではなく行動である。智目行足といふ言葉の示す通り、實踐的な智慧、知と行との合一が空の世界觀の性格である。もつと適切に言へば、ひたすらに人間の救ひを目指しての智慧が空であつて、このやうな智慧が生活の凡ての部面を滲透し貫徹するに至るほどの徹底した實踐性を、この世界觀は要求してゐる。

人生の究極の目的である涅槃を得るためには、六つの修行、すなはち布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜を成滿しなけ

ればならないことは、大乘教の説くところであるが、この六波羅蜜のうち五つは最後の智慧（般若波羅蜜）あることによつて、救ひを目的としての修行であることができる。

「五波羅蜜は般若を離るる時、波羅蜜の名に値しない。五波羅蜜は盲の如く、般若波羅蜜は眼の如くである。」（大智度論）とか、
「般若波羅蜜は五波羅蜜を導いて薩婆若（一切智）——佛陀に至らしめる。五波羅蜜は般若波羅蜜を得なければ、増長することができない。」とかいふ言葉は、空の智慧が單なる知識でないことは勿論であるが、また觀想的な靜的な智慧に終らずして、普く生の全體の層面に浸潤してそれを活氣づけ、それを方向づける極めて動的な明察であることを、事實について示してゐるのである。

× × ×
空は緣起であつた。それは個物の存在性を否定するが、その否定は虚無へ導くことでなくて、否定によつて何事かを肯定することであつた。空は緣起であるから、個別的な存在者を否定することは、それを在らしめる一切の關係を肯定することである。一つの存在者を在らしめる關係は無數、無限であつて、その全幅はとてい人間知識が憶測し得る限りではない。この意味で、先にも述べた如く、人間の持つ知識は、精華を誇る最高の科學的知識でさへも、不確定であるといふ外はない。近代の物理學が誇る業績の一つは、因果律の發見であると言はれてゐるが、如何に高度の物理學も、一つの

存在者を在らしめる總起的な原因結果と同時的な理由歸結との全體を知ることが出来るものではない。それはそれとして、一つの個別的存在者を一と呼び、それを在らしめる諸關係の總體を一切と呼ぶならば、一を否定することはそのまま一切を肯定することである。一の側から言へば、一に於いて一切を見ることであり、一切の側から言へば、一切が一に於いて顯れてゐると見ることである。これを即一切といひ一切即一といふ。空はただの名詞ではなく、空するといふ動詞に使はれることが屢々あるが、空するといふ働きは、無限の否定の過程で、一者に於いて全體者を見ようとして無限に進みゆく行である。一に於いて一切を了得しようとする實踐的智慧である。全體の聯關から切り離して抽象的に固定させ、何か特別な存在であるかのやうに考へ勝ちな一つ一つのものを、空してゆくことは、その一つ一つのものをとの生きた綜合的な聯關に歸へすことであり、流動する全體の聯關を仰ぎ頂くことである。思へば、空の世界觀に於ける否定とは、何とまことに途方もなく大きなものを肯定することではないか。

空を或る人は絶對者と呼んでゐる。もしこの名が西洋臭い實體といふやうな概念の名残りをとどめないとすれば、この名もまた適しいと言へよう。その意味からは、空はまた全體者と呼ぶことも出来るであらう。かうした積極的な名稱の方が、空の豊かなる内容を充分に示すのである。龍樹の名高い偈文、

「空義あるを以て、一切法は成ずることを得、もし空義なければ、一切は則ち成ぜず。などは、空の最も豊かなる相を把握せずしては、とうてい理解されない。

かうして私どもは絶對者、全體者に到達したが、眞の絶對者は相對者に於いて如何にして現れるかが、次の問題になつてくる。佛教の目的は、限られた小さな我が限りなき大きな我と一如になつて、大きな我がありたけの力を凡ての方面に働かすことであるが、その相對的で部分的な存在者に於いて、絶對者・全體者が現れてゆく道程が、刻々の修道でなければならぬ。この積極的な否定の道筋は如何にして歩まれるであらうか。これは興味の深い問題である。

(つづく)

〔空の世界觀第二講〕

會のたより ◇米英撃滅の「くろがね」を作るため各寺院の梵鐘を獻納せられた由、涙ぐましく總力戦への大進軍でした。若し三千年の祖國の傳統に生きる吾々がこの有史以來の一大決戦で闘ひ損ねたらアジア十億の民は爾後何百年間を虐げられるは勿論のこと彼等は思ふさま惡鬼劍をふるふことではせう。戦争は斷じて勝たねばなり

ませぬ。緒戦に於て闘ひつた不敗の態勢を一億結束して、その運用よろしきを得せしめ最後の最後まで勝ち抜かねばなりませぬ。比島渡第一〇六〇七部隊(石原莞爾) ◇小生何も判らぬながら、吉田総二郎先生の隨筆には非常に心うたれ、幾分づゝ信仰が深く揺下されてゆくやうに思ひます。(長野縣上伊那郡小野村熊谷参市)



擔當 中 村 辨 康

(質問 歡迎)

來迎と不來迎との區別

(問) 甚だ恐入りますが左のことについて御たづねいたします。

一、現世にて信心開發して平生業成すれば、如來の來迎を待つに及ばず淨土に往生すと。

二、此の世は一心に念佛して居れば臨終は必ず如來の來迎を受けて極樂に往生すと。右來迎不來迎の儀を明かに御教示の程を御願ひ申し上げます。(熊本・玉名・江川・五野一之)

(答)

來迎に二つあつて普通には臨終の時に見佛を「來迎」と申し、平生の時來迎を「見佛」と云つて居ります。また如來の五種増上緣の中には「見佛増上緣」と云ふのがあつて如來の増上緣力に依らなけ

れば「見佛」することが出來ず、見佛の出來るのは偏へに如來様の御力に依るのであると申して居りますが、元來「淨土」は如來の世界であつて、如來の居ない世界ではありませんから、往生と來迎とは表裏の相違に過ぎないことになるのであります。随つて平生業成と云ふことも見佛なき「業成」はあり得ません。若し見佛なき業成を認めるならば、それは屹度「見佛」を限定して考へて居るか、或は「業成」即ち「往生業の成就」を限定して考へて居るかであつて、そこに必ず何かの相違があるにきまつて居ります。

臨終不來迎を説くのは眞宗であります。それは平素に於いて往生の業が成就して不退轉の位となつて居るから、敢へて臨終の來迎を

待たなくとも心配なく往生が出來ると云ふのであります。これは來迎なくしては往生が出來ないとする説に對抗するもので、もう約束が出來て居るから、先方が不在でもそこへ乗り込めると云ふ考へに外なく、絶対に安心し切つた態度であつて、自信のほどもさこそと存じます。

然しながらこれは淨土を「念佛全土全衆生」の「全」的なものと見ず、淨土と佛とを別々に考へて居るからで、封建思想に影響されて居るものであらうと思ひます。

淨土と阿彌陀佛とは一體不二であつて、阿彌陀佛の大慈悲たる「心」と阿彌陀佛それ自體の「身」と阿彌陀佛の世界たる「土」との三は一體の三面に過ぎないのであります。この「心身土」の「是三無差別」は佛教の通規であつて別々に考へてはならないものののに、封建時代にその當時の時代思潮に依つて別々に考へるやうになつたために、思想上の混雜を來たしたのであります。それで淨土宗や眞宗などでも阿彌陀様と淨土とを別々の存在の

如く考へたのでありますが、それは間違ひであります。

往生と來迎と見佛とは別のものではありません。來迎見佛なき往生なく、往生なき來迎見佛はないのであります。随つて平生業成とは平生往生であり平生來迎であり平生見佛であります。平生に來迎がありながら臨終に不來迎と云ふ道理もないから臨終來迎と言つてよい、また逆に來迎があり通しにあるのであるから、特別に臨終のみの來迎を考へる必要がないので「不來迎」を説いたのであるとしてもよいでせう。



然しながら本願の中に「臨終來迎の願」があるのですから、それを敢へてこちらの方からこばむ必要ありませんし、また假りにそれはまた眞宗で云ふ如く信仰不徹底の機根の爲の「願」であるとしても、平生業成の機には「阿彌陀佛」が不

要だとする理由もないのですから、臨終にも平生にも「來迎あり」として一向差支へないと存じます。

ですからこの問題は信者の方としては、平素に如來様に御目にかゝり通しにかゝつて居るのであつて、取り立て、「臨終來迎」とさ

化佛化菩薩は何んな佛か

(問)

謹んで御教示をお願い致します。

私はまだ入信日尙ほ浅きものにて

甚だ愚なる御尋ねを致しますが、お經や禮讃を拜聴して居りますと「化佛化菩薩」と云ふことが出て來ますが、是は何う云ふものでましますのでせうか。右甚だ恐入りますが御教示お願いいたします。(滋賀・蒲生・老蘇・山岸忍齋)

(答)

三部經や禮讃に「化佛菩薩の來迎」を説いて居りますのは、おほく信仰のまだ低いところに言つて居るのであつ

なければならぬと言へますが、それも自分の力では如何ともしがたいので偏へに如來様の御力にすがるべきであり、且つ平生も然る如く臨終にも御來迎を被つて本當に如來様のふところの中に安住することも確かにしたいものであります。

て、上品上生などの如き高度の信仰人を語るところには報佛自ら來られると言つて居ります。

佛身には三身説四身説などがあつてその代表的なものは三身説でありますが、三身説は「法身佛、報身佛、應身佛(又は化身佛)」であり、四身説は應身を勝劣の二に分けて四身とするのであります。元來この分けかたは少し無理でありまして物事を複雑にする弊が此處にまで及んだのであります。それが爲に「三身即一」と云ふことを言はねばならなく



なつたわけで、即ち一ならば必ずしも法と應とに身の宇をつける必要はなかつたのであります。それをしも更に法身を大日如來、報身を阿彌陀如來、應身を釋迦如來としたから、この三身が即ち一であるならば、それは皆な化身見たやうに思へて錯覺を起し一層譯が判らなくなつてしまふのであります。

元來阿彌陀は無量であります。また無量光は「偏一切處」であります。ですから天地一切の事々物々は阿彌陀ならざるはなく、阿彌陀の無量光ならざるはありません。みな彌陀の光明であり阿彌陀そのものであります。それを眞佛とは見えず、化佛化身としか見えなものは見る人の認識が足りないからであります。佛身は全一であつて個々ではあります。随つて化佛化菩薩と見るのはこちらの信仰がまだ至つて居ないからであります。佛身

は無量を統一した一でしかありません。全即個の姿に於いてのみ佛身があるからであります。

化菩薩の方も同じことであります。この場合阿彌陀佛とその協士としての觀音勢至の二菩薩を指すので佛に付随したものであり、阿彌陀佛を除外して言ふことは出来ないのであります。

大體に於いて「化佛」は佛像として眺め得

七 生 報 國 と 往 生 淨 土

(問)

七生報國の精神と往生淨土の信念とは矛盾するやうに思はれますがこれに就いての御高説を御願致します。(茨城縣・古河町・鐘村生)

(答)

七生報國の思想は一般には輪廻轉生思想に依るものと云はれて居りますが、その實「輪廻思想」は業感思想に基づくものですから、業の命ずるところに従ふべきで、自分の意思通りにはならないから、正

られるもの、又は明相或は瑞相として眺められるものを云ふのであります。即ち具體的な役相がそれでありませう。眞佛は十方目前のもので、また念佛の信に依つてのみ感得するものですから、言葉をもつて説明は出来ません。また假りに御説明申し上げ得たとしても段々日數をかけて行かないと御理解も出来まいと思ひます。之に反して化佛は一定の形を持ち言葉で言ひあらはせるものであります。

確かに言ふと「淨土往生」の思想に根據を置かねば七生報國することが出来ません。即ち淨土往生した人は自由に「還來」し得るので「七生報國」が出来得ますが、單なる轉生では業の力に左右されて自分の思ふ通りにはなりません。この故に「七生報國」と「往生淨土」とは極めて密接な關係がありむしろ往生淨土に依つてのみ七生報國の可能もあると云ふのです。



戦時下の茶の湯

廣 川 千 芳

大東亞戦争を國を擧げて勝ち抜いてゐる折柄、一方に茶道の發展をみてゐることは誠に嬉しいこととござります。

それについて何かお話申上げたいと存じますが、我々未熟者がこれといつて申上げることもありませんし、各位様にも最早御承知のことでありませうが、私が只今まで師匠より懇々と申されたことの二つ二つを拾ひ上げて申述べてみたいと存じます。

先づ茶道の精神とは何かといふに、これは即ち皇道精神であつて日本傳統の奥床しくも

美しい禮節であり又修養でもござります。茶道の本義は和敬清寂であることも申上げるまでもありません。そこで師は「假にゐるにも篤と居よ」とよく仰せられます。誠にその如くでござります。

ある日のこと國民學校の前を通りました時に校庭で點呼の豫備教練を行つてゐました。何心なく立止つて見てゐると、八月の焦つくやうな炎天に玉の汗を流して一生懸命にやつてをられ、誠に御苦勞様に存じてゐる内、教官の「伏せ」の號令と共にビタリと伏す動作

は見事でした。浮腫などは一人も居りませぬ。まるでそのまゝ何時間でもゐるかと思はれたのに直ちに號令一つで忽ち飛起きて飛出す様は、實にキビ／＼してゐてしかも落つきがあり、さすが軍隊は規則正しきものと拜見いたしましたものでござります。

これがやはり「假にゐるにも篤とゐよ」だ、軍隊にも茶はあるもの」と存じました。これをものに例へて申すなら「假に置くにも篤くと置け」とでもいひませうか、さすれば必ず粗相はないものと存じます。

また「空しきに入りても在ますが如く」とお教へを頂きますが、全くこの心ならば無禮も粗忽もなきものを、人が見てをらぬと一寸横着が優勝であります。私の知人に極く氣輕なお年寄がゐります。ある日親戚の家にゆき、親密な間柄とて遠慮とてなく、「今日はどうしたい。」等といひつゝ案内もをはず上り込み、茶の間に通つてみると今しも食膳には里芋の煮たてがさも甘さうにポツポツと湯氣をたてゝゐりました。この人が少々意地が汚い

方なので、奥の方から「アア小母さんよく来たわネ」といつて奥さんが出てこられ、あわててグット呑込んだが相慣と咽喉につまつて目を白黒させてしまひ、サア大變と家中で大騒ぎを演じたといふことがござります。これ等は甚だ殺風景な例ではあります、親しき中にも禮義ありでたとへ空しきに入つても在



すが如く、四角張らずとも一應の挨拶あつて、その後でゆるゆると頂けば斯様な手數もかけず、自分も苦しまずに美味しく頂けたであります。

初心の方の中には一々法有りのお茶なんかめんだうだといはれる人もたまにあります。何も習はしで、初めの内は面倒でまだるつこい感じもありませうが、進むに従つて手習も順序よくなり、逆にこの方が手際よく早く出来るやうになります。まあ無理のない合理的であると申しませうか決して無駄がありません。ことを空手でやつたり、一つことに二度三度と手間をかけることなく裕々たる落つきが出来て立派に見えます。こう申し上げると、今度は叮嚀過ぎたり、出過ぎたりしないかとお思ひになつたり、おど／＼したりする事があります、このやうでは返つていぢけに見苦しく御損であります。

追々この落付きが出るやうになれば、釜の沸へる音はもとよりのこと、お火鉢の前に座し鐵瓶の音を聞きましても雜念が拂はれ、

無私の境地に入るとでも申すやうに何んとも云ひやうのない清淨な心もちになります。茶道とは茶碗の中をかき廻して泡を立てることだけではなく、この精神が日常のことに現れ、應用されなければなりません。ある日私が知人の家に参つた所が、いきなりその御主人から「君の所に娘を稽古にやらうかと思つたが、止めた」と、ことの外の様子なので、私もそれは何故なのかと尋ねました。するとその人の云ふには、先日家内がある茶會へ誘はれて行き、それは實に盛會で來會者の美しさは目もさむるばかりであり、中に女學生も多勢見へてゐたが、中々の混雑で酷い目にあつた。あれでは茶も何もあつたものでなく、定めし御亭主側も迷惑であつたらうといふ話でした。

ますます意外なお叱りで、私も驚き、何う

もとんでもない事をいはれると思ひました。しかしよくよく考へて見ると、この頃は茶の湯が一つの流行のやうに思はれ、まだ茶の湯

をこ存しない方々が一體何んなものか一つ見ておかう等と見物のつもりで大勢でお出掛けになり、さては亂脈ともなつたことゝ存します。卑しくも斯道を學ばれる方に左様な無作法はありませんと、その時もお答へしておきました。聖戦が進むにつれ皆様の緊張の度もいよいよ加はり、煩はしいことも多くなつたりしてつい殺風景になり勝ちでありますので健康とか修養とかに重きがおかれ、茶の湯、生華も推擧されて大發展をみることになり、たまたまかかる失態を致したかと存じます。然し誰とても最初からの上手はなし、お心得の方ばかりはなく、年月と共に進みますこと故餘りお咎めなきやうお願ひします。さりながら世間より誤解を受けたり致すのも我々如き微力者の不徳の致す所にて、たとへ初心者たりとも社中の過失は師匠の過失であり、諸先輩流派の恥であります。または茶道ばかりでなく日本人としての恥辱とならぬこともないではありませぬから深く慚む所でございます。

電車などの乗降りにも他人を押しのけ我勝ちに押し込んで、一足乗ると落つて櫛櫛車内を見廻したりする人があります。又朝夕の混雑時は別として、左程に満員でない電車が入口にギッシリつまつて急ぐ用事を持つ人もついに乗り損なつたり大迷惑になります。かやうなことを見るにつけ、我田引水のやうですが、若し茶の湯の心得が少しでもあればと思ひます。斯道では出入口を塞ぐことを誡めてゐるのでございます。これとは逆に遠慮のあまり返つて他人に迷惑をかける場合もあります。又何處の席に參つても自分の出した塵や屑類は自分で仕末して持ち歸ります。私共はこうしたことに一々注意してゐますが、これは斯道ばかりでなく少し心得のある方なら誰も致し、珍しいことではありません。してみれば茶道といつても格別に難しいものではなく、普通の人の道でござります。皆も何卒儼然がらずにこの興味ある修養を進んで遊ばされるやうお奨めします。私共斯道に携はる者は専心精進して皆様と手を引き合ひ

少しでも銃後のお役に立たせて頂かねばなりません。日本古來の風習を顧て心身を鍛錬し、戦時下に相應しい茶道を一筋に過たず進みたいと念願してゐます。さすれば不斷の心構へも出来て、萬一空襲を受けたりしても徒らにあはてふためく事もなく、落付いて萬事を處理し、茶の一碗もたしなむ位の餘裕も出ると思ひます。

常に師より申されることですが、百圓札を束にして藏つておいても何の役にも立たぬ。これを貯蓄するなり、崩して日々に使つてこそ役に立つ、茶道もその如く、これはお茶席の歩き方でこれは何んの座り方だと特別の事柄にして仕舞ひ込んでおくのではならぬ。行住座臥すべてお茶として時により事に當つて臨機應變の處置をとることこそほんとお茶である。そして華麗をさけ質素を旨として何事にも真心をこめて致さねばならぬ。こう承つてをります。何ことも急がずあせらずたゆまず師事致してゆきたいと思ひます。すべて一生お稽古なのでございます。



これ田からさー

← 夫の監視所

うゝまふれ若し
敵機なりせば……



→ アメリカ防空陣
「エッ、ヒカリまで
ふよいてるやが」



答 問

オノ山田さん
おくさ



三



ほら、お買つたん
ごさう



b

駄目です
そんな夕に誰が
来るんですか



「頼む、もう一本つけて呉れ、
は着る物を二交買つてお
げよ」



不服従運動





米國人の本性

前 淨 土 宗
米國開教區監督

福 田 闡 正

米英人と云へば文化の優れた第一等國人だと讃えられたり、あこがれたりかぶれたりした人々が随分澤山あつた時代もあつた。然るに彼等米英人の我日本及日本人に對する態度は、實に偽り多き行動と言語とであることを知つた時、思はず彼等の欺瞞に迷はされてゐたことを恥づるのである。口には立派に人道を説き乍ら平氣で非人道的行爲を敢てするものゝ多きには實にあきれてゐるのである。全世界に平和とか平等とかを聲明し乍ら極端な侵略政策を敢行したり、差別待遇の甚だしきを極めたりするのは、此亦全世界に類を見ること能はざる程である。近頃大東亞戰爭開始以來鬼畜の如き彼等の暴虐よりは眼を覆ひ言

語を絶する程である。元來彼等の假面は單に知らずして野蠻の極を行ふのみでなく、思ふ存分の野蠻性を十二分に發揮し二度と眼をあけ得ざる極度の暴行を敢てする本性を具してゐるのである。其假面を辭し之れに心酔した我國朝野の人々は彼等の本性を見抜くこと能はざりし其愚や誠に笑ふべきの極であつたが、此の度こそは眞の非人道的なすがたをハツキリと見定め得たことと信ずるとともに、米英心醉の夢も醒め得たことと思はれる。

×

特に米國人は英國人よりも薄べらな口先の多い。實質のともなはないことを口に出し揚げも降しも出来ぬことが澤山ある。だか

ら議會や會議で決めたことでも反古にすること位は平氣の平左である。英國はそれほどもないらしい。

今アメリカでの一例をあげてみれば、予が米領ハワイに赴任して三年目即ち昭和四年の頃布哇縣の縣會で、基督教の策動もあつたがクリスト教國の主義の上から暗々裡に佛教排斥の意味して、先づ小學校生徒に一週間一時間の宗教々育を施すべし。其方法としては學校から教會へ其往復は自動車で送り迎えをし費用は教會で負擔し必ず米國語を以てすべし。言はず語らず基督教教育をなすべく議決されたのであつた。在留日本神佛兩教は相當に騒ぎたてたが如何とも仕がたし、基督教側は今度こそは天下を握つた感じで晒々としてゐる。佛教側は數回會議を開いたが適當なる對策がない。而も議決後の今日如何とも致方ない。さすれば基督教と同様宗教々育をなすにしても差し當り米國語を以て語り得る開教使幾人ありや、亦自動車の準備と其費用いかにす

るやの問題に難色ありて互に窮々たりし時、予は日本より歸布した翌日出席して種々聽きとり予の意見を簡単に述べた處、衆議は我意見のまゝに決した。其要は一週間一時間は實に貴重なる時間である。此時間を普通教授の學修專攻奮勵のために與え宗教々育は毎日曜日ミツチリと寺院及教會に於て教育す。この趣旨と意見とにより多くの父兄に謀りたるに悉く賛成した。依て其理由を文書に作り父兄の總意として全父兄がサインして縣及び教育局へ懇願した。

此の大舉實行により縣當局及教育局は且つ驚き且つ策し且つ議した。事が父兄の大部分のサインでもあり如何ともなし難く遂に審議の決果この縣令は無効となし、大事に至らずして基督教憤懣のみを残して落着を見たのであるが、此騒ぎで效を奏し利を得たものは寺院及日本神教教會である。即ち毎日曜日の如きは平常より十倍以上の生徒を收容し神佛兩教の宗教々育は頗る隆盛を極め且つ兩教の眞

の意義をも知らしむるに至つたのであつた。斯様になつても議會の尊重とか態度とかを云云することなくアツサリと水に流して平々坦々晒々然たる處は亦他の國人に見ること能はざる特徴とでも云ふべき處であらう。これを我國の縣令や議會にて決し法令として發布されたるものを、如何に衆人の運動にしても無効となる筈もなく晒々としてゐる議員もない譯でソコロが自由な放埒な勝手な野蠻性な一等國人であるかと苦笑する次第である。

×

次に予の在任中に布哇縣知事でフアーリントンと云ふ人があつた。彼は有名な排日家で無理からでも日本人及日系市民を苦しめたものであつた。同情相集りし福永裕を幾千の婦人から命請ひされても斷然死の宣告を敢てしたこともあつた。或時予は日本佛教代表として同知事を訪ふた。所要談話は世界三聖の一人釋尊の降誕祭を有名なワイキキ公園に於て行ひたい、是非同公園使用を許されたい、同

公園も名譽であらうと申込んだ。何故に名譽かと反問するから多くの人類が喜ぶからであると答えた。日本きらいの古臭い佛教ざらいの彼に信根きざしたのか但しウカ／＼とか予の顔をつく／＼見てゐて、よし許さうオーライと叫んだ。何が氣に入つたのか實に不思議であつた。

この事ありし以來再三同知事を訪問するが非常に喜ばれ、時として別院にも來り人類問題につき忌憚なき意見の交換をなしたるため親善の度はい／＼加はつたのである。昭和七年の頃京都に於て太平洋會議が開かれ彼知事も出席する事となつた。此時とはかりに彼に添書を與え京都に於ては必ず知恩院に立寄つてくれ亦何か得る處あるべしと約束した。一方知恩院へは排日知事が日本を訪問する是非優待接待せよ其接待には元布哇開教使の板倉師及其令嬢を以てせよと懇々依頼して置いた。彼は予の紹介狀を以つて知恩院に行きたるに同山の大寺院なること設備の完備なるこ

と風影の明朗なることに驚き室内の歡待が至れり盡せりであつたから大喜びであつた。

その記念として山門前に起ちて寫眞を撮り持ち歸りて予に示し歡喜と共に言ひ知れぬ或ものを獲得した旨を話した。或時所用ありて同知事を自宅に訪ふた。書齋に迎へて入り來る予の顔と知恩院山門前の寫眞とを眺め乍ら何とも云ひ知れぬ嬉しさの限りを喜ぶ様子に、何かと尋ねて見ればアノ知恩院を思ひ出す一生を通して尤も印象の深かつたのはアノ寺だとの話に彼は餘程心中に何か得たるものあるかの如き様子であつた。

×

こんな事があつてからの彼は猛烈な排日知事とうたはれたものが、頓に日本を知り日本に親しみ純然たる親日家となりきつたことは果して何ものゝなせしことか不明なれども亦一の不思議と云はねばならぬ事柄である。かくして同知事より種々なる便宜を與えられ又後援も與えられて年月を重ねたるが、彼は

後年病を得て重態なりし時彼の病室に見舞ふと且つ喜び且つ勇み例の知恩院山門の寫眞を指し、兩手を合掌し口の中にて何か稱えてサソ満足氣に予に笑顔をおくり安心立命してゐるかの如き態度を示したのであつた。恐らく口に稱へたのは念佛かとうかがはれたのである。

全く佛縁ありて知恩院の境内をふみ一念發起を自然界に得て合掌して死についた彼の心の中にも佛はましましたのであつた。極端な排日排佛で有名であつたものがフとした動機で直に豹變して親日信佛の模範人となつたことは此亦變つた行爲の一つであつた。アメリカ人は世界中で自己の行動が一番正しいと言信し自己の宗教が自己の文化が自己の總てが一番優秀なりと片信して晒々たるだけそれだけお目でない人種である。悪い／＼極悪いものが何かの動機によりて豹變して善の善人となることは日本にも随分あるがアメリカでは自然事とされてゐるらしい。何の理由もなく

只何となく嫌いだといふて大嫌に嫌つたものが一寸したことからは無二なものとして好きになるといふ本性は誠に分別なきコードモと同じで、堂々たるものゝ智識あるものゝ爲すべき事柄ではない筈である。

アメリカはどんなことでも日本とは反對である。日本が左側通行と云へば右側通行と云ふし、上と云へば下と云ふし、西と云へば東と云ふし、南と云へば北と云ふ、善と云へば惡と云ふ。何でも彼でも反對である。故に南と南と衝突するし西南太平洋と云へば同じ様にくるから衝突して、ありもしない艦船や飛行機を失ふことになる譯だ。日本にとつては誠に都合がよい。

此後もある事だが純アメリカ本性を顯はして大法螺を口にまかせてやつてくれれば只一撃である。

しかし彼等の本性として直に豹變して手を揚げるだけであるから世話はないのだ。

法語
解説

大調和の中に進む

……法然上人法語解説(其十七)……

中村 辨康

法語

口傳なくして淨土の法門を見るは往生の得分を見失ふなり。その故は、極樂の往生は上は天親龍樹をすゝめ、下は末世の凡夫十惡五逆の罪人まですゝめ給へり。然るをわが身は最下の凡夫にて、善人をすゝめ給へる文を見て卑下の心をおこして往生を不定におもひて順次の往生を得ざるなり。

然れば善人をすゝめ給へるところをば善人の分と見、惡人をすゝめ給へる所をば我分と見て得分にするなり。かくの如く見定めぬれば決定往生の信心かたまりて、本願に乗じて順次の往生をとぐるなり。

(東宗要)

(法語抄七三)

解説

何事をなすにつけてもはつきりしためどをつけてやらないことには、大變損な道を歩かねばなりません。それゆへ多年の経験を弟子

達に「口傳」とすると云ふ教育法が出来たのでありますが、これは武藝文藝の諸藝に亘つて傳授傳法となり遂には秘傳となつて弊害をも生じたのでありました。然しながら先輩から指導を受けると云ふことは何事にも極めて大切なことであります。

殊に精神界のことはみな未経験なことばかりでありますから、色々の思ひすごしをして煩ひ迷ふ場合が多いのであります。淨土の信仰に就きましても此の御法語にありますやうに、極めて高いところから最も低いものまでも一様に引きくるめて救はれ行く教でございますから、それは丁度三角の頂點のやうなものでありまして、尖端は小さな一點ですけれども根底は非常に深く深いのであります。つまり凡てのものゝ粹を集めて選びに選び鍊つたものでありますから、簡單のやうに見えて居ても其實極めて複雑の

要素をその内容にもつて居るのであります。この故に極めて幼稚で平易なやうでありながら、極めて難信なところもあつて何うして易行道などとは云へないやうに見えるのであります。

また一旦信仰を得たやうでも、何時の間にかあやふやになつて、これで本當なのか知らと自ら迷ふことさへ間々あるのであります。

淨土の信はものごとを複雑に考へる人には損で、簡単に素直に呑みこんで行ける人に極めて得な法門であります。

つまり生半可の智慧では齒が立たないのであります。ですから法然上人も

「學生骨になりて往生や失はん」

と諷められて居ります。畢竟あまり穿索すると却つて力まけをするのであります。向ふがあまり大きいからです。富士山にしてもそうであります。餘り近くに寄つてよく見ようとすると却つてその美しさを見失つてしまひます。遠く離れて大まかに眺める方がよく判るのであります。即ち理論から進むよりも信から行くのがよいのであり、また事實理論から進んだ人でも結局は淨土門に轉向する人が多いのであります。

淨土教の祖師方で印度や支那に於いて

印度——龍樹菩薩、天親菩薩

支那——菩提流支、曇鸞大師、道綽禪師、善導大師

これらの有數な方々は何れも立派な學者であります。なかんづく印度龍樹菩薩は「八宗の祖」とも云はれまして大乘佛教の元祖でございしますから、何の宗もこの龍樹菩薩を崇敬して居るのであります。

淨土教義の上では自力難行道、他力易行道の區別をなし御自分でも念佛の易行に就かれたのであります。

また天親菩薩は世親菩薩とも申しますが、初めは小乗教の學者でした。然るに兄の無着菩薩の懇切なるすゝめに依つて後に大乘教に歸し、ことには淨土教の爲には「淨土論」一卷を作つて五念門等の學説を立て、信仰的基礎付けをなさつた方でありします。

次に菩提流支は北印度の人ですが、永平元年に支那に来て一生を支那佛教の爲に捧げた方であります。地論宗北道派の元祖であります。天親菩薩の「淨土論」を翻譯し、又は曇鸞大師の爲に「觀無量壽經」を「是れ大仙不死の法なり」と云つて授けたりしましたので、淨土の祖師の中へ加へられることになつたのであります。この人の著書と傳

へられるのに「麒麟聖財論」四卷があり、二藏三輪の教判を立て、淨土教を「頓教法輪」としたと言はれます。

次に曇鸞大師は山西省の代州の人とも或は太原の生れとも云つて生地がはつきりしませんが、佛教研究の途中に病氣にかゝつたので、仙術を學んで長生きしなければ徹底的な佛教研究が出来ないと思つて陶隱居と云ふ仙人をたづねて仙經十卷を得て大喜びで歸途洛陽を通りすぎました時、たま／＼菩提流支に遇つてその小仙術の非なるを悟り、遂に大仙の法たる淨土教に歸したのであります。天親菩薩の「淨土論」の註二卷を始め色々の著書があります。

次に道綽禪師は山西省太原の人であります。玄中寺に居た時曇鸞大師の碑文を見て淨土教に歸しましたが、其の教化に依つて晉陽、太原、紋水三縣の道俗は悉く念佛信者になつたと言ひ傳へられて居ります。

また佛教各宗で使用する居る珠數は此の人から初まつたと云ふことであります。

次に善導大師は安徽省荊州府(又は泗洲府とも云ふ)の人で初め明勝法師の弟子となりましたが、後に玄中寺に行つて道綽禪師の弟子となり三昧發得して悟眞寺や光明寺に念佛を唱導し三十餘年洗浴の外は衣もぬがず寢處も定めな

つたと申します。阿彌陀經を書寫すること十萬卷、極樂の圖をかくこと三百幅と云ふやうに非常な努力家で、其の教化もまた尋常でなかつたのであります。

これ等の方々は何れも有數のゑらい學者であります、みな念佛に歸せられたのでありますから、淨土の教義の極めて高度のものたることが想像されませう。それにも拘らず何にも知らない愚痴の者までが、唯だ「念佛すること依つて救はれて行くのですから淨土教こそは「一切を網羅して居る教」であることがよくわかるのであります。

ですからこれを説明するにあたりましては、學者に對しては學者の納得するやうにも言へますし、また學問のない人には極めて平凡にも言へるのであります。然しながらこの兩様の説明をどつちやに考へてはいけないのであります。往々にして思ひすごしをしてわけがわからなくなるものとがあるからであります。

だからこの御法語はそこをはつきり區別して讀まなければいけないと教へられたのであります。

またこの御法語では智者學者を善人の中に擧めて人間を善惡の二つに區分して居られますが、それはまた大變に意義のあることで、本當の信仰は自分はおもひ上がるところ

のない絶対的反省のドン底から眞剣な氣持になつて立ちあがつて行くべきことを最要とするので、先づ以て自分を極悪最下の者と反省しなければならぬからであります。それでなければ「順次業」と云ふものにならないのであります。

順次と云ふのは「順つぎ」と云ふことで、順序より大調和の中に次ぎ／＼と發展して行けることでありまして、そこに停頓状態がないのであります。

また「順後業」と云ふのもありますが、それはトン／＼拍子に行けないことであり、一時停頓することでありまして、即ちまだ不調和のところがあるために、それがのどき去られるまではその進展が滞るのであります。

信仰は何と云つても自分をすつかり「無」にして何事も素直に受け入れて行く陶冶性の必要であります。誠に承諾必謹の氣持こそ大切であります。承命必遵の氣持こそ緊要であります。

忠誠心は自分を無にするところに現はれる心境であります。

されば人生の最要は自分を最低最下の者にして行くことであります。この腹さへきまればあとは何でもないのであ

ります。

「虚にしてゆき、實にしてかへる」

と云ふ言葉がありますが、自分に思ひ上つたところがあるのはいけません、その反對に卑下して卑屈になつてしまふのもいけません。

善導大師は

「嬌慢と弊と憊怠とは以て此の法を信すること能はず」と云つて居ります。弊とは「やぶる」ことであります。卑屈になつて自分をいじけさせることであります。嬌慢も悪いが卑屈も悪いのであります。何つちにもならない謙虚な素直なところが大切であります。

こゝにこそ初めて一切が滞らないでスラ／＼と調子よく進んで行けるものがあるのであります。それはまた一分の往生でもあります。即ち一分の順次業となるのであります。

法然上人は「おのが得分」と申されて居ります。誠にもしろいお言葉であります。

おのが得分とは素直になつて承諾必謹することであり、す。これこそ誰でも出来る眞實なことでもあります。誠に有り難い御法語であります。

編輯後記

◇米の供出で華々しい成果をあげ
統後の心意氣を示しました。

◇栃木縣の吉田村では毎月八、九
十の三日間を「米なし日」と定め
て、この間は全く米を食べずにす
ませ、そしてこれを供出しました

◇その他の村にも自分の家の定め
られた割當米をさいて供出した所
が澤山あります。つまり自分の食
べる米を食べずに供出米として出
したものです。農村の努力には涙
ぐましいものがあります。

◇これは要するに勝ち抜くために
米も彈丸である。輸入しなければ
ならぬ外米を減らせればそれだけ飛
行機が出來、軍艦が出來、彈丸が
出來るのであると考へたからこそ
このやうに米の供出が出來得たの
です。

◇一粒の米もこうした精神がこも
つてゐることを知つて、いよいよ
報恩知恩の精神を旺んにしませ

5。

◇武田信玄が繼嗣勝頼と一諸に食
事をした時に勝頼が飯の上に汁碗
の汁をかけて食べるのをみて「武
田の家も二代にして亡びんとす」
と嘆いたといはれてゐます。即ち
信玄の目からみれば勝頼の飯に汁
をかけた事に亡國の兆が現れてゐ
たのです。食事を大事にすること
は即ち人生を大事にすることです。
並々ならぬ辛苦の結晶で出來
た米は同時にわれわれの身體を養
つてくれるものです。

◇佛教では食事の時に米が自分の
口に入るまでに拂はれたいろ／＼
の苦勞を考へ、自分がこの米を食
するだけの價值があるか何うかを
反省し、そしてこの米によつて道
のために働きのために酬ふので
あると念じてから箸をとるやうに
教へてゐます。即ち佛徒の食作法
といふのがこれであります。

◇吉田絃二郎先生は放逐に御執筆
に御多用を極めながら益々御健勝
で相變らずの御指導を頂きまし
た。

◇小説家北林透馬氏は長くビルマ
にあり某部長として軍報導班で活
躍し多くの功績をあげました。こ
の頃歸還して早速「ビルマを語る」
を寄せられました。深謝します。

◇福田蘭正氏は前米國開教區監督
昭和十二年に歸國するまで十年間
の米國生活で彼等の本性を知りつ
くしてをられます。

◇「毒杯」の小杉利壽氏は現在目
黒區在郷軍人分會班長、日支事變
九江攻略戦決死隊に参加し金鶏勳
章拜受の榮に輝く唯一の生存者、
和やかなる文面の中にも熱血溢る
ゝ體験、吾等の胸をうつものがあ
ります。また和合雜誌「天真」の
主幹糸山天真氏の戰友で本稿は同
氏の紹介で頂きました。

◇何分にも紙の不足のため止むな
く減頁しました。御寛容下さい。

各位の御激勵に答へて出來るだけ
努力いたす心算でゐます。(村瀬)

淨土 五月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十年四月十日印刷納本
昭和十年五月一日發行
(定價十二錢)

東京市芝區芝公園十五號明照會館

編輯兼 眞野正順

發行人 眞野正順

東京市芝區芝公園十五號明照會館

印刷人 赤尾光雄

東京市牛込區西町七(東京)

印刷所 大日本印刷株式會社

東京市神田區淡路町二ノ九

配給元

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料一錢)

會費 金一圓五十錢

一ヶ年 (送料共)

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可。(毎月一回一日發行)
昭和十八年四月廿日印刷納本・昭和十八年五月一日發行

淨

土

第九卷 第五號

(停)

外金十二錢(送料)
外金十三錢(送料)
外地定價



強腦・強精に光明丸

腦病全身神經
系諸病腦溢血
鼻耳小心恐怖
腦毒症神經痛

主治
腦病、神經病、腦神經衰弱、不眠症、ヒステリー、てんかん、ヒキツケ、小兒麻痺、腦膜炎、腦毒症、腦溢血、高血壓、半身不隨、心悸亢進、耳鳴、頭重、肩首コリ、(性の)鼻病、耳病、多夢惡夢、頭腦力記憶力思考力減退、健忘症、小心恐怖症、恐迫觀念、憂鬱症、取越苦勞雜念妄想、胃腸障害。

光明丸は腦疾病、神經系統の疼痛や硬直痙攣、動脈硬化高血壓を治療し、神經を鎮め、腦毒や全身の病毒鬱血等を除去し、血行を整へ、全身を賦活し、種々の不快苦痛なる症狀を取去り、眞の安眠に導き、強腦強壯ならしめ、頭腦力記憶力思考力を増強せしめ、心身共に健全明快に導く即ち根本原理に即した合理的の優秀藥であります。

試供藥と
説明書を
進呈

有名藥店、百貨店、二有り品切、節八直接本舖へ注文をフ

價
同總 廿十六
三十 日日日
用 日 日 日
十五 七五三二
圓圓圓圓圓圓

(本舖) 京都伏見いなり山 願成閣
(代理店) 全國一流賣藥卸賣會社